

すでに、暫定的なガルフ戦争停戦の成立から、一ヶ月が経過した。アメリカ帝国主義ブッシュ政権は、国連の国際的合法性なる錦の御旗をふりかざして、イラクに対する屈辱的な「恒久停戦決議」を国連安保理で掲げ上げ、イラク国民議会はその受諾を批准した。だが、アメリカ帝国主義軍隊は、イラク南部を占領し続け、イラク人民による反サッダム政権打倒の蜂起がイスラム原理主義潮流とクルド族、そして進歩勢力の大連合政権に結実するのを事実上阻止した。客観的には、サッダム政権を当面温存させる方向をとっている。その狙いは、何か?

一方、戦後処理の眼目であるアラブーイスラエル紛争の解決へ向けた動きが活発になってきた。ガルフ戦争は、アメリカ帝国主義の一元的支配が中東で確立されたこと、そして、それは、世界に対しても同様の支配を意味した。この支配は、世界レベルでは、どのような意味を持つのか?

アラブとしては、イスラエルとの領土紛争の解決の足並みが揃ったわけではない。それは、ガルフ危機後、初めて開催されたアラブ連盟評議会におけるエジプトとシリアの相違として明確になっている。アラブーイスラエル紛争の中

心は、パレスチナ問題であるが、「新世界秩序」と「新地域秩序」の下で、PLOの追い落とし、または、PLOにかわる代表権を掲げ上げようとする帝国主義ーシオニストー反動の攻撃と、それへの対応としてどのような方向性を模索しているのかを、今号では見ていくことにしたい。

一 ガルフ戦争後の「新世界秩序」

ガルフ戦争におけるアメリカ帝国主義の勝利は、東西冷戦構造解体後の「新世界秩序」を浮かび上がらせた。

この戦争は、第一に、第三世界諸国に対しては、帝国主義の支配秩序に従わないものは、帝国主義の総力によって解体されることを示した。第二には、帝国主義諸国間でのアメリカ帝国主義の支配的な位置を強化し、この戦争を通して、日本、ドイツなどの経済強国の政治的地位を失墜させたことを示した。アメリカ帝国主義に逆らう勢力はサッダム政権のように、軍事的に解

月刊 中東 レポート

第67号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL. (03) 291-5533
編集 J.R.A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費24000円

- 目次
- 「新世界秩序」とパレスチナ問題
 - 資料
 - 一項目文書（主旨）
 - ・被占領地代表団がベーカーに手渡した
 - ・民族統一指導部アピール
 - ・パレスチナ解放人民戦線の立場
 - ・シリアの和平秘密提案
 - 重要日誌（一九九一年三月一日）
 - （四月一〇日）
 - 16

体されるということである。

その近代的な装いにもかかわらず、ガルフ戦争は、「一九世紀の砲艦外交」そのものである。

「正義の戦争」という旗の下で、アメリカ帝国主義も、アメリカ帝国主義を支援した諸国も、自らの帝国主義的、一国的利益に基づいて動いたにすぎない。

アメリカ帝国主義にとっては、とりわけ、石油の権益を防衛し、自らの中東支配を確実なものにするためのものである。また、アメリカ帝国主義を支援し多国籍軍に参加したほとんどの国は、アメリカ帝国主義からの圧力を回避し、戦後のアメリカ帝国主義との友好的な関係を作ることと、援助を受けることを期待したことであつた。ボーランド、ブルガリア、チエコスロバキアなどの東欧諸国も形だけの軍を送り、また、パキスタンなども形だけの軍を送っている。

これは、ガルフ戦争の中で明確になつたもう一つの事実を浮かび上がらせている。すなわち、かつての超大国であつたソ連が完全な無力を示したことによって、いっそ、アメリカ帝国主義の軍事、経済的圧力を恐れて行動せざるをえない国々を拡大していくのである。ソ連は、イラクに撤退を宣言させ、アメリカ帝国主義の地上戦介入を阻止しようとしていたが、完全に無視され、なおかつ、アメリカ帝国主義を非難できない立場に置かれている。

ここに、「新世界秩序」の姿が現われている。

帝国主義の植民地主義的要求—政治・経済制度の資本主義化を受け入れざるをえない条件にある。それは、政治・経済的に、帝国主義の多国籍資本に有利な条件を作ることを要求しているのである。

第一に、帝国主義においても、アメリカ帝国主義の一元的支配の下で、NATO、日米安保などの政治軍事同盟の枠組みを基本にして、各帝国主義の国民国家としての主権を制限し、多国籍資本の展開を通じた経済的な闘争を中心とした帝国主義間の体制が作られようとしており、日本、ドイツに対してのアメリカ帝国主義の闘争としての性格を持っているのである。最近言われている経済の「相互依存性」という言葉が意味するのは、国民経済、国民国家を制約していくことである。

第三に、この「新世界秩序」は、旧社会主義諸国も含み、世界レベルでアメリカ帝国主義を柱とする帝国主義の支配秩序の中に国家的に組み入れられていくことになる。この矛盾は、直接的に、第三世界諸国人民、各国人民に転嫁される。そして、「新世界秩序」は、アラブ人民の反民族意識の高揚に見られるように、反米闘争をもって、人民が立ち上がり、この「新世界秩序」の新たな挑戦者を作り出している。

二 中東における「新秩序」への再編過程

ガルフ戦争後の直接の展開の場としての中東においても、この「新世界秩序」に基づく再編が進行している。

①ガルフ戦争後初のアラブ連盟評議会

ガルフ戦争後初めてのアラブ連盟評議会が、カイロで開催された。アラブ連盟は、このガルフ戦争をめぐって、エジプト・シリア・GCC（ガルフ協力会議）諸国のようにアメリカ帝国主義率いる多国籍軍の側に立った諸国と、イラク支持に立ったPLO・ヨルダン、そして、多国籍軍の介入を支持しなかつた諸国に分解した

市場に依拠している以上、アメリカ帝国主義の関係の悪化は、直接に彼らの安全保障と経済への影響がでてくるのである。

二

それは、第一には、アメリカ帝国主義の巨大な軍事力に裏打ちされた一元的支配である。

第二には、アメリカ帝国主義に対する唯一の存在であつたソ連が無力化したことから、第三世界諸国は、民族自決、自立経済を帝国主義の巨大な力に対抗して確立していく条件が奪われた。マレーシアのマハティール首相は、「もし、あなたが、米と友好的であるなら、それは結構。しかし、あなたが彼らを困らせるなら、彼らは、彼らがパナマで行ったような行動をとることができ。あなたが頼ることができると」という言葉で、このことを明確に語っている。

第三には、帝国主義間の関係の変化である。アメリカ帝国主義は、声高に、国際的責任の分担を他の帝国主義に要求した。典型的には、日本、ドイツなどのようにそれぞれの一国的制約の下では「積極的」に動けない帝国主義に対して圧力をかけた。また、戦後においては、日本、ドイツを先勝国のサークルから閉め出し、戦後復興を含む中東での利益の配分からも閉め出そうとしている。

日本、ドイツも、経済大国になっているが、アメリカ帝国主義と対抗しうる力を持つてはず、その前に屈せざるをえない条件に置かれているのである。その根拠は、明白である。つまり、アメリカ帝国主義の巨大な軍事力に取って代わるだけの力がないことと、経済的には、日本への圧力が高まっている。

こうした「新世界秩序」は、以下を意味する。第一に、アメリカ帝国主義の巨大な軍事力を柱に、第三世界に対する帝國主義による共同覇權とでもいうべき体制をとつて対話し、政治的には民族自決の放棄を、経済的には自立経済の放棄を要求しているのである。第三世界諸国は、「新世界秩序」の中で生き残るために、

第一には、アラブ＝イスラエル紛争をこの機会に解決することによって、アメリカ帝国主義の一元的支配の下で、アラブ＝イスラエルの共存体制を作ることである。

第二には、戦後処理としてのイラクに対する措置と、クウェート、サウジの再建をどのように行うかである。

第三には、そのプロセスを通して、この地域での反帝民族主義の立場にある諸国、勢力の一掃としてある。

この三つの要素は、イラクが軍拡を続け、帝國主義支配に対する脅威となっていたのを、ガルフ戦争で軍事的に粉碎したことから、一挙に進展した。

パレスチナ革命にしろ、シリアなどの反帝民族主義政権にしろ、アラブ民族主義総体としては、ソ連という超大国の存在があつて初めて、帝国主義の力になっていた。しかし、ガルフ戦争は、一挙にアラブ世界の様相を変えている。

②ガルフ戦争後初のアラブ連盟評議会

ガルフ戦争後初めてのアラブ連盟評議会が、

カイロで開催された。アラブ連盟は、このガルフ戦争をめぐって、エジプト・シリア・GCC（ガルフ協力会議）諸国のようにアメリカ帝国主義率いる多国籍軍の側に立った諸国と、イラク支持に立ったPLO・ヨルダン、そして、多

国籍軍の介入を支持しなかつた諸国に分解した

く、サウジからのハシミテ王家廃絶まで出され
るに至っている。

サウド王家とハシミテ王家の間には、王族同
士の争いの歴史がある。それは、サウド王家に
追い出されるまで、メックとメディナを支配し
てきたのがハシミテ王家であったということであ
る。サウジが、現在の状況を利用してハシミ
テ王家の解体を狙っていることが明確に出でてい
る。そして、前回のベーカーの中東歴訪時には、
ヨルダンは無視されてしまっている。

もともとフェイン国王は、米、英との関係が
強かつたが、今回のガルフ戦争では、イラク支
持に回った。そのために、米英からの支援を打
ち切られただけでなく、サウジなどのガルフ諸
国からの援助も止められてしまった。ガルフ戦
争以前から危機的な状況にあったヨルダン経済
は、決定的に破綻した状況にある。

ヨルダンがサッダム政権を支持したのは、大
きくは二つの理由がある。それは、第一に、ヨ
ルダンは、経済的な危機の中で影響力を拡大し
てきたイスラム原理主義に対し、左翼勢力の
合法化に踏み切って、バランスを取ることで政
権の延命を計ろうとした。しかし、政権自身は
イスラム原理主義、左翼勢力、パレスチナ人の
圧倒的なサッダム支持の声と対決できない状況
にあった。そこで、自らもサッダム支持を打ち
出すことで、政権の延命を計ることを選んだの
である。そして、その成果として、大衆的なデ
モでは、人々が、サッダム大統領の写真とフセ
イ

イン国王の写真とを掲げて行進したのである。第一には、イラクとの経済関係である。イラク＝イラク戦争を通して、ヨルダン経済は、イラクの市場と石油への依存度を強め、第一の貿易相手国がイラクとなつていった。国連の対イラク経済制裁決議によって最大の経済的打撃を受けたのはヨルダンであつた。したがつて、経済的にも、ヨルダンは、他のアラブ諸国と足並みを揃えられるのは、明確であつた。

しかし、イラクの敗北はヨルダン経済にさらに打撃を与える、それに追い打ちをかけるように、米、サウジなどの報復的な制裁をも受けてゐる。

こうして、フセイン国王は、四面楚歌の状況に置かれ、国内的不安定要素が、さらに高まっているのである。フセイン国王は、打開の道を、歐州帝国主義からの支援に求めようとしている。

どのような「国際和平會議」であれ、「地域和平會議」であれ、ヨルダンは、パレスチナ問題との関連で、重要な位置を占める。

一つには、現在のエジプトを軸とした連合軍には、国内のイスラム原理主義、左翼勢力との対決抜きにはありえないし、ヨルダン自身でそれをやりきる力量はない。また、反対に、現在の立場を続けていけば、経済的にも破綻し、国内的にはより混沌とした状態になっていくしかないだろう。

シリਆは、ヨルダンへの援助を通して、ヨル

③イラク内の人民反乱

③ イラク内の人民反乱

カイロでのアラブ連盟会議の開催直前に、サッダム政権は、南部のシーア派の反乱と北部のクルドの反乱を鎮圧したと発表している。だが、実際には、いまだに反乱は継続されている。ヨルダンは、もともと、イラクとシリアとの二大軍事大国との関係のバランスの中で独自性を作ってきた。だが、現在では、自らの独自性の基盤を欧州との関係に求めざるを得なくなっているのである。

こうして、フセイン国王は、四面楚歌の状況に置かれ、国内的不安定要因が、さらに高まっているのである。フセイン国王は、打開の道を、歐州帝国主義からの支援に求めようとしている。

「和平會議」であれ、ヨルダンは、パレスチナ問題との関連で、重要な位置を占める。

一つには、現在のエジプトを軸とした連合軍に参加したアラブ諸国の側にヨルダンが立つためには、国内のイスラム原理主義、左翼勢力との対決抜きにはありえないし、ヨルダン自身でそれをやりきる力量はない。また、反対に、現在の立場を続けていけば、経済的にも破綻し、国内的にはより混沌とした状態になっていくしかないだろう。

シリアは、ヨルダンへの援助を通して、ヨル

がなされた。
この記者会見におけるムバラク大統領の発言では、第一に、「地域和平会議」において、「どのような場合であれ、国連安保理常任理事国五ヵ国の参加、または、米国とソ連が地域の前線諸国、すなわちシリア、エジプト、イスラエル、パレスチナ人、ヨルダン、レバノンと同様に参加すれば、和平会議は成功するだろう」と思う」と述べており、米国とソ連が参加していれば、「地域和平会議」も否定しないとの立場を示している。同時に、パレスチナ人の参加については触れても、PLOについては、言及しなかつた。
また、ガルフの安全保障体制についても、「我々が今まで持っている考えは、安全保障の

ト議会としての外相レベルの会議へと持ち越されている。この会議後には、エジプトはエジプト外相マギドを事務総長に推すことを決定しアラブ諸国に提案している。

この会議で非常に明確になったことは、ガルフ戦後のアラブ世界において、反イラクで多国籍軍側についたアラブ諸国がイニシアチブを持つことである。とりわけ、エジプトは、アラブの指導者の地位を固めようとしている。

この会議の直後に、エジプトのムバラク大統領とシリアのアサド大統領の会談が行われ、シリアルアがエジプト-ヨルダン関係の仲介に乗り出したとされる。四月一日に行われた記者会見では、アラブの統一の再確立と、「国際和平会議」に至るまでには、まだ時間がかかるという発言

きであり、我々が外国からの援助を必要とした時に、調整のためのこの問題は討議されるということである」と答えていた。また、この外国とは、米国と他の連合軍諸国であることを明確にしている。さらに、ムバラク大統領は、「『多国籍軍の任務』は完遂していない。平和は安定している。多国籍軍諸国は未だに残留しているのである。これらの諸問題が終われば、我々は地域からのすべての外国軍の撤退を要求するだろう」と述べて、アメリカ帝国主義軍などの多国籍軍の撤退を早急には求めない立場を明らかにしている。

このムバラク大統領の発言について、シリア側が合意しているのか否かは不明である。シリアは、「地域和平会議」については反対する立場を表明しており、エジプトとのニュアンスの相違が出ている。ガルフ戦争中には、エジプト、シリアとも、イラクがクウェートから撤退すれば全外圧勢力の撤退を要求すると表明していたが、エジプトの方は、即時撤退を要求しないと、シリア側も合意しているのか否かは不明であ

②ヨルダン

PLOアラファト議長指導部と同様に、困難な立場に置かれているのは、ヨルダンのハシミテ王家である。前回のベーカーの中東歴訪の際には、サウジからヨルダンのハシミテ王家の廃止と、パレスチナ＝ヨルダン連合国案が出され

反乱自身について言えば、南部のシーア派の勢力はイスラム共和国樹立を望み、北部のクルドは民族解放を望んでいる。また、シーア派を支援し、クルドのイラク国内最大勢力を支援してきたイラン、そして、クルドの一派と、バース党、共産党などを支援してきたシリアが存在していた。

いずれにしても、シリアとアメリカの合意が成立していると考えられることと、レバニーズ・フォーシズ側も、「平和的闘争によって」との態度を表明したことから、レバノン政府が決定したように、四月二〇日には、本来レバノン軍のものであつたハーデュエアの返還が行われるだろう。そして次の段階の四月二〇日から六月二〇日には、大ベイルート外郭部の武装解除、次には、六月二〇日から九月二〇日の期間に「全土へのレバノン軍展開」を行う要求が高まっている。

不安定要素としては、第一に、アラブースラエエル紛争解決の動き、とくにイスラエル側の譲歩がどれだけあるのかということ。つまり、アメリカ帝国主義が、どれだけ本気で、イスラエルに圧力をかけ、領土返還問題を解決していくのかにかかっている。

(5)ベーカーの中東歴訪と再編
以上のように、アラブ側の再編がまだ不確定な状況にある中で、再度、ベーカーが中東を歴訪した。前段で、トルコを視察した後に、イスラエル、エジプト、シリアを訪問し、帰路の途中で、ジュネーブではヨルダン外相とも会談した。今回は、「地域和平会議」という提案を持っていたイスラエル、アラブ諸国の妥協を作り出す意図であった。

この「地域和平会議」は、もともとイスラエル側が提唱したものであり、前述のエジプト発言に見られるように、アラブ内にそれを容認する考えも生まれている。この中の身の明確な内容は不明ではあるが、ニューヨーク・タイムズなどが伝えるところでは、アメリカとソ連がこの「地域和平会議」を主催するということで、この前提として、ソ連がイスラエルと正式に国交

⑤ベーカーの中東歴訪と再編

第二は、民兵の社会復帰の保障である。すでに、レバノン政府は、モスレムとキリスト教徒の民兵双方から同数の四〇〇〇人ずつを雇用する計画、さらに市民四〇〇〇人を雇用する計画を発表しており、サウジからの追加援助一億ドルを確保している。

第三は、タイフ合意に基づく国会議席の拡大（九六から一〇八議席へ。モスレムとキリスト教徒議員数の同数化）—政府による拡大議席分と空席分の任命における抗争。

そして、第四に、パレスチナ勢力の武装解除の問題である。

を回復するとされている。イスラエルは、直接対話を主張し、「国際和平会議」を当初から拒否してきた。また、アラブとの交渉の前提として、平和協定締結を要求するなど、イスラエル内の極右シオニストの側の発言が強まっていった。

領土の問題に関する、八一年のサabra・シャティーラ・キャンプの虐殺の責任者であるシャロン現住毛相は、ゴラン高原の返還はありえないとし、入植地建設を継続、強化すると発言している。また、労働党のラビンも、ランド・フォー・ピースの提唱者ではあるが、ゴラン高原に関しては返還しないとの立場を打ち出している。

アメリカ帝国主義の調停を困難にしようとする立場からの発言が行われている。

立場からの発言が行われている。

アメリカ帝国主義の側は、エジプト、シリアなどがアメリカ帝国主義の支配の枠の中に入つた以上、「安全保障上の理由で被占領地を保持する必要がある」としてきたイスラエルの論拠が薄れたとしており、アメリカ帝国主義による安全保障の枠組みの中でイスラエルーアラブの共存体制を作り出そうとしているのである。実際、ベーカーの訪問を受けた後、イスラエルは、直接交渉の前提ということで、「地域和平会議」の受け入れを表明した。エジプトも、基本的にはこの考えに合意しているが、シリアからは、賛成は得られなかつた。和平への条件があるとの認識では一致したもの、「地域和平会議」については、さらに検討するというような結果にしかならなかつた。

権の存続が有利であったからである。アメリカ帝国主義が恐れたのは、この反乱派の勝利が、イランとシリアによる分割支配に結果し、イランとシリアの力が強まることであつた。

同時に、アメリカ帝国主義がサッダム政権温存を選択したのには、アラブ民族主義を慰撫する意味も込められている。つまり、アラブから見たら、クルドもイランもアラブではないから、むしろサッダムを支持するというのが、一般的なアラブの反応でもある。また、イスラエルにとっても、アラブ内部での分裂、対立があるのが望ましい条件としてある。

これを知ったサッダム政権の方は、国際的認知をうけるためにも、米帝のつきつけた屈辱的な恒久停戦の条件をすべて受諾したばかりか、迅速に実行したし、国内的には、「政治改革」を公約する一方、軍人への給料直上げを約束し

レバノン政府は、三月二一八日の閣議で、四月末までにすべてのパレスチナ人とレバノン民兵の武装解除を実行するとの決定を下した。この閣議では、レバニーズ・フォーシズのみが反対した形になった。

当初の民兵解体は、レバノンの民兵組織のみを対象とし、パレスチナ勢力は次の問題としていた。しかし、ジャジャに民兵解体を受け入れさせるために、パレスチナ勢力も武装解除対象とすること、特別措置としてタイフ合意に規定された国会議員指名におけるキリスト教徒の代表の割合を保障することが、合意されたのである。これには、もちろんシリアとアメリカの合意が土台としてあるのは明確であった。以上の経緯から、上記の閣議決定では、パレスチナ人も武装解除対象に含まれることになった。

そして、四月一日こよ、レバノン国方相のア

ているが、この合意は困難な状況にある。一方、アメリカ大使クロッカーは、帰任後、パレスチナ勢力の武装解除を決めたレバノン政府の立場を支持し、全外国勢力のレバノンからの撤退がタイフ合意の精神であると発言する一方で、ジャジャラベニーズ・フォーシーズ幹部、カタイエブ（ファンジ党）幹部との調整を行つた。

パレスチナ勢力の武装解除は、レバノン政府側では、民兵の武装解除に反対するジャジャラベニーズ・フォーシーズに対するものであると同時に、現在の中東再編の枠組みの中では、PLOの政治的な地位を奪い去ることによって、PLOの力を弱めていくためのものとしてある。これは、アメリカ帝国主義の望むところである。レバノン政府のこの政策は、シリアの承認を得たものである。シリアは、一方でPLOのを取

して、レバノンでの民兵

ル・ムラーが、レバニーズ・フォーシズの放送で、「レバノン政府は、あらゆる可能な手段をもって、決定を履行し、それに従わない者と対決するのに十分な力を持っているし、アラブ、国際の両レベルで支援を受けている」と発言し

また、被占領地のパレスチナ人代表との会議においても、一〇項目の条件が提示され、合意を作ることはできていない。

イスラエル側の態度の変化は、アメリカへのリップ・サービスの域を出でていないし、全被占領地返還についての言明は、その後もない状況にある。

⑥再編の現段階

総じて、「新世界秩序」作りに向けてのアメリカ帝国主義による中東再編の進展は、以下の三点を特徴としている。第一に、アラブ側の統一した立場を作ることにおいて、時間がかかること。第二に、イスラエル側の積極的な妥協がないこと。第三に、アラブ内でのヘゲモニーをめぐって、それぞれの動きが現われてきたこと。以上から見れば、この再編が急速に進展していくには、多くの障害が存在している。

現在の「新世界秩序」の中で、アラブ諸国が生存していくとした場合、アメリカ帝国主義の中東支配の中に入りつつ、その中でしか、自國の利益を貫徹できない構造が作られており、その利害の対立とヘゲモニーをめぐって、イスラエルとアラブ、アラブ諸国内の矛盾が形成されていくことになる。

三 中東再編とパレスチナ

外の民族統一を打ち固めて、それを乗り越えていく意義を強調している。

こうした認識から、PFLPは、被占領地内での闘いの強化と、民族的統一を中心におくべきであると主張し、実践的には、ヨルダンでの合法政党の強化を行いつつ、現在の情勢の中でのサバイバルと被占領地での闘いの強化を軸に置いている。

一方、反アラファト派のPNESFに結集するPFLP-GC（パレスチナ解放人民戦線—司令部派）なども、PLOとして再統一して、この現在の流れに対抗する方向へと向かっている。

たしかに、PLO内の統一と団結が力となるが、それには、解決すべき問題が次のようにある。第一には、現在のPLO自身の民主化と民族的統一の再確立が何よりも重要なこと。第二には、蜂起を強化するという問題においても、被占領地の民族統一指導部の統一と、イスラム原理主義のハマスなどとの統一が重要な問題となっていること。第三には、PLOを解体しようととする流れに対して闘うこと。

実際、サウジ等は、金を使ってアラファト議長を追い出し、カリド・ハサンをPLO新議長にしようとする陰謀をめぐらせてるとされるなど、PLOを骨抜きにする動きが強まっている。

現在の中東再編において、これまでのパレスチナの在り方の転換が問われている。この「新世界秩序」は、民族自決を否定し、帝国主義の

あるという共通認識を持っている。

現実的にも、PLOが現在の和平の動きからも排除され、また、レバノンでの軍事的存在が困難に置かれ、被占領地の蜂起を物質的に支援してきたクウェートなどを中心にしたガルフで、経済的にも困難な状態に置かれているのが現状である。

この困難は、アラファト派から反アラファト派勢力まで共通したもので、パレスチナ民族解放運動自身の危機として存在している。この危機を乗り越えていくために、PNC開催要求が高まっている。

PLOは、現在の和平過程の中に入るため、被占領地のパレスチナ人代表がベーカーと会談するのを許可して、PLO抜きの「解決」を作ろうとする流れに対抗した。これは、アメリカ帝国主義の要求をのみつつ、和平過程の流れに入ろうとするからである。バッサム・アブ・シャリーフ氏の発言にそれが現われている。彼は、第一に、パレスチナ代表は、PLOの指名した人であればよく、第二に、ガザ、西岸は全面返還でなくともよく、第三に、一定期間、国連が駐留し、パレスチナ国は、非武装国家とすること、第四に、自動的に、PLO政府にならなくてもよいとしている。ここには、現在、アメリカ帝国主義—イスラエルに妥協しても、PLOとして和平の流れの中に入ろうとしている立場が示されている。だが、この発言は、後で、PLOとしての公式のものではないと、取り消

しになっている。いずれにしても、PLO側の危機意識を示したと見られる。

PFLP（パレスチナ解放人民戦線）は、現情勢を次のようにとらえている。「国際レベルでは、米帝は、何よりも自らの権益を満足させ、アラブ国家政治のレベルでは、アラブ情勢の解放し、シオニスト存在と対決し、そして連帯、統一、発展、民主主義と進歩という汎アラブの民族的目標を実現する道を選択しようとするいかななるアラブ国も存在する余地はない」。また、「アラブ国家政治のレベルでは、アラブ情勢の後退、崩壊と分断が生じており、「その典型的な例は、アメリカの傘と地域における米の手先の下にすらブロックを規制しようとする画策」が進行しているとともに、「キャンプ・デービッドの全アラブ化」もしくは、それよりも悪いものが強要されるだろうと展望している。そして、国外追放されたパレスチナ人が、アラブ諸国の国民として組み込まれて処理されていく危険性を指摘している。帝国主義—シオニスト—反動が、パレスチナ人が民族自決権の最優先課題としてきた帰還の権利をそうした形で処理しようとしている陰謀に対して、ますます被占領地内

民族統一指導部アピール

●アピール六九号（抄訳）

土地と獄中者の呼びかけ

インティファーダの英雄的な大衆の皆さん。帝国主義—IATOの侵略を受けて立った英雄的なイラクの不退転の闘いは、イラク人民が捧げた偉大な犠牲のおかげで多くの成果を達成した。それは、パレスチナの大義を再度最前線に登場させることになったのである。つまり、中東、世界の諸問題には、二重の基準があつてはならないといふべきである。

その前段として、「イスラエル」経済強化への肩入れ、地域の人民の利益と安全保障を踏み台に、「イスラエル」の安全保障実現への支援が進行しているのである。アメリカ帝国主義は、イラクの不退転の闘いを損なおうとして、国連安保理が新たに不正な反イラク的決議を強行して屈辱的な条件を突きつけていた。一方で、アメリカの戦闘機は、イラク領空を挑発的に出撃飛行しており、他方では、連合軍は南部イラクを占領し続けている。そして、連合軍は、サッダム・フセイン大統領が民主主義の拡大に向けた新たな措置を発表した後では、とくに、イラクの領土的統一を要求しつつイラク反建に力をあわせるべきであったイラク反政府勢力の動きが始まることによって、即ち、支援し始めたのである。

同時に、国連安保理は、パレスチナ人がさら

に四人追放されそうだというのに、これに対してもはらの現実的措置を取るでもなく、単に悲嘆の意を表明したにどまつた。ここからわかるのは、ワシントンが確立しようとしている新世界秩序なるものの眞の性格が、人民を抑圧し、人民から正統な諸権利を奪い取ることを土台と

した秩序だということである。

また、イラク、パレスチナの大義、そして自由で民族主義的で誠実な者すべてを踏み台にしてワシントンが確立しようとしている中東のアラブの秩序の真の性格も明確である。

この点から見て、また、パレスチナの民族的大義に対するフランスの態度、そして、最近、PLOはパレスチナ人民の代表能力を失つてはいないと信ずるとするダグラス・ハードの発言から、我々はこの「カ国」に対して、パレスチナ正統な代表としてのPLOを再度承認するよう呼びかける。

インティファーダが我々の選択する道である。すべての政治的成果は、インティファーダがあればこそ獲得できたのである。また、インティファーダこそが、帰還、民族自決、パレスチナ人の唯一正統な代表としてのPLOのもとに、パレスチナの地に独立パレスチナ国を建設する権利を実現していく保障であり続けるだろう。また、ガルフ戦争中、そして戦後も、敵は、封鎖、外出禁止、パレスチナの分断・孤立化、飢えさせる攻撃、パレスチナ商人の店を掠奪し、使用料の強要に加えて、パレスチナの村々を襲撃して逮捕キャンペーンを強化し、罰金を搾りたてるなどの数々の攻撃をかけているが、これに対峙していく闘い、また、アメリカ帝国主義とアラブ地域におけるその手先とが、PLOに代わる政治的代表を掲げた陰謀を共謀しているが、それに対峙し続ける保障は、インティ

ファーダなのである。

そこで、我々民族統一指導部（以降、統一指導部と略）は、町、村、キャンプの大衆の皆さんに呼びかけたい。大衆的、民族的統一を打ち固め、闘いの方法や形態を強化し、かつ、新たに創り出したい。パレスチナの地においての人民の権威を強化し、何人も奪うことのできないパレスチナ人民の民族的権利をないがしろにしようとするアメリカイスラエルの陰謀を打ち碎こう。パレスチナ人民の処刑者であるイツハク・モルデハイ将軍、シェイキ・エレツ将軍の退官式に出席して、パレスチナの人民的利益、闘争、犠牲を踏み台に自らの利益を実現しようとする輩に対しても、その式典に参加しないよう警告する。もし、この呼びかけに応えないならば、我々は適切な措置を取らざるをえなくなるだろう。

祝福されたラマダンの月に入っているが、この月は聖戦と忍耐の月である。この月が示す聖なる性格を尊重し、社会・経済的協力の繋がりを深め、神の恵みを分かち合うよう呼びかける。また、路地委員会の皆さんに呼びかける。敵が仕掛けた飢え政策の打撃を受けている家族の必要性を充たし、共同社会連帯協力の基金を創りだそう。食堂は、昨年の民族決定に従って、通常通りに午後も営業してほしいので、それを再度強調する。また、イースターを迎えるにあたり、パレスチナのキリスト教徒の皆さんに、あいさつを送りたい。

統一指導部は以下を呼びかける。

一、パレスチナの統一を損ない、民族指導部について、工場主とともに、実行状況を把握しよ。労働者の皆さんに呼びかける。ソ連やエチオピア、その他の諸国から移住してくる人種者を取り込むシオニストの計画実現の前段として、地域の労働者委員会に呼びかける。この問題について、工場主とともに、実行状況を把握しよ。労働者の皆さんに呼びかける。ソ連やエチオピア、その他の諸国から移住してくる人種者を捨てさせ、最後には家を捨てさせようとして、我々の生活そのものに対する敵の措置に対抗するため、大地に帰つて、農業協同組合を組織し、土地を改良しよう。

二、シオニストがパレスチナ人を文盲にしておこうとするのに対抗し、学生の皆さんに呼びかける。どんな状況でも、授業時間を守ろう。また、諸大学の学生と教員理事会に呼びかける。

一、パレスチナの統一を損ない、民族指導部

結合し、団結している人民に対し、敵はそれをおこうとして陰謀を仕掛けているので、ハスラエル紛争を解決することである。

二、攻撃部隊の皆さんと、すべての町、村、キャンプの皆さんは、夕方の抵抗活動を活発に展開し、自分たちで創った計画に従つて、抵抗活動を強化しよう。また、攻撃部隊の皆さんは、泥棒を追いかけ、容赦なく処断しよう。

三、シオニストの工場で労働しているパレスチナ人労働者を故意に集団解雇するなど、パレスチナ人を飢えさせようとする敵の経済的攻撃を止め、解雇された労働者を吸収しよう。また、打ち勝つために、すべての民族的工場に呼びかける。解雇や、工場閉鎖などのすべての措置を止め、解雇された労働者を吸収しよう。また、解雇された労働者を吸収しよう。また、泥棒を追いかけ、容赦なく処断しよう。

四、シオニストがパレスチナ人を文盲にしておこうとするのに対抗し、学生の皆さんに呼びかける。どんなん状況でも、授業時間を守ろう。また、諸大学の学生と教員理事会に呼びかける。

五、イスラエルは、東エルサレムの併合、入植地建設、土地や資源の接収を続けてはならない。六、イスラエルの占領地不法支配を直ちに停止させる。

七、和平過程は、国際社会の意志で推進されるべきであり、イスラエルの同意や拒否に左右されなければならない。

八、和平過程を前進させるのに最適な方式は、国際会議の開催である。

九、占領地の地形や人口構成などを変更しようとするイスラエルの政策は和平過程の障害になれる。パレスチナ人の不当逮捕なども、和平気運を妨げる。

一〇、アラブ－イスラエル紛争を恒久的、かつ公正に解決する唯一の方法は、パレスチナ－イスラエル紛争を解決することである。

一一、土地の安定と繁栄は相互主義に基づいて達成できる。

シオニスト当局に大学を再開させるために、大衆的抗議行動を組織しよう。衆の抗議行動を実行しよう。

五、皆さん、以下の活動を実行しよう。

一、パレスチナ製で間に合うイスラエル商品をボイコットする必要性、とくにエルサレムにおけるボイコットを再度確認する。人民委員会と攻撃部隊の皆さんは、この指令の実行状況を把握するよう呼びかける。同時に、すべての民族的工場に呼びかける。民族製品の品質を改良し、妥当な固定価格をつけよう。

一、四月の第一週は、大衆に対する掠奪行為と使用料・罰金の強要、そして、収税吏と警官による税金取り立てに対し、戦闘的、抗議行動を強化する。

一、四月九日は、インティファーダが新たな月に入るので記念し、かつ一九四八年に行われたディエール・ヤシン村虐殺に抗議するゼネストの日。榮光あるイースターにあたり、すべてのキリスト教宗派と、パレスチナ人の皆さんにあいさつを送る。商店の皆さんは、三月三一日と四月五日は、二十四時間営業してほしい。

一、四月の第二週は、クウェートで苦しんでいる同胞のパレスチナ人に連帯して、戦闘的連帯活動を強化しよう。

一、四月の一二日は、イブラヒム・アル・ライが占領軍による捕虜として殉教したのに抗議し、すべてのシオニストの監獄で殉教した獄中者のことを忘れないために、激しい行動と憤激を高める日。

一、アイード・フトルの前日は、商店は二十四時間

一、アイード・フトルの期間は、相互に訪問しない、殉教者や追放された人々の家族を訪問して、社会連帯を強化しよう。さらに、休日の祝いごとは、訪問し合うレベルに止め、他の祝いごとは控えよう。

一、四月一六日は、パレスチナの民族的象徴、そして指導者であったカリール・アル・ワジール（アブ・ジハド）の暗殺に抗議し、際立った闘争の激化と憤激の日。あらゆる場所で、民族的祭典を行い、彼の不滅の闘争史を再現しよう。

一、四月一七日は、パレスチナ獄中者の日。シオニストの監獄、拘留センターに囚われているすべてのパレスチナ人獄中者との特別の連帯を示そう。

一、聖なるラマダンの期間が終了するまで、商店の皆さんは、夜中の二時まで営業しよう。ラマダン最後の金曜日にあたる四月一二日には、パレスチナ国は夏時間を探用する。

PLO・民族統一指導部 一九九一年四月一日
パレスチナ国にて

被占領地代表団がベーカーに手渡した一項目文書（主旨） 三月一二日

一、PLOは、パレスチナ人の唯一正統な指導

部であり、あらゆる政治交渉において我々を代表する権利がある。

二、パレスチナ国をイスラエルに隣接するパレスチナの地に樹立すると宣言した一九八八年一月のPNC決定を堅持する。

三、パレスチナに関するすべての国連決議を受諾し、支持する。その代わりに、これらの諸決議の即時完全履行を求める。

四、パレスチナ人の自決の権利を含む民族的諸権利の承認を求める。

五、イスラエルは、東エルサレムの併合、入植地建設、土地や資源の接収を続けてはならない。

六、イスラエルの占領地不法支配を直ちに停止させる。

七、和平過程は、国際社会の意志で推進されるべきであり、イスラエルの同意や拒否に左右されなければならない。

八、和平過程を前進させるのに最適な方式は、国際会議の開催である。

九、占領地の地形や人口構成などを変更しようとするイスラエルの政策は和平過程の障害になれる。パレスチナ人の不当逮捕なども、和平気運を妨げる。

一〇、アラブ－イスラエル紛争を恒久的、かつ公正に解決する唯一の方法は、パレスチナ－イスラエル紛争を解決することである。

一一、土地の安定と繁栄は相互主義に基づいて達成できる。

パレスチナ解放人民戦線の立場

①政治声明（全訳）

PFLP 政治局

一九九一年三月一九日

戦闘的なパレスチナ人民の皆さん、栄光に輝くアラブ大衆の皆さん

八月一日、イラク軍がクウェートに入ったが、この日は、この危機の勃発以前からの自分たちの犯罪的役割を隠蔽しようとして、かつ、この危機が爆発段階に到達するまで悪化させ続けようとして反イラク同盟が強弁してきたような危機の開始を印したのではない。ガルフ危機の開始の日は、イラク－イラン戦争終結まで遡るし、この戦争後、ワシントンとその同盟者をしてガルフにおける自らの権益、とりわけ、石油の権益を脅かされたと不安がらせたイラクの軍事・技術大国としての成長であった。そこで、奴らは、この大国を最小限に削減する必要があると判断したのである。

当初、アメリカ政府は、他の同盟者とともに、地域における帝国主義の権益の安全を確保する上での要求、その最大は石油とシオニスト国家の安全保障の要求にそって、イラクが自発的に自国の力量のかなりの部分を破壊するよう仕向けようとしたが、イラク指導部は帝国主義の要求を拒否した。この拒否は、大規模な挑発的、

配から自らを解放し、シオニスト存在と対決し、そして連帯、統一、発展、民主主義と進歩という汎アラブの民族的目標を実現する道を選択しようととするいかなるアラブ国も存在する余地はない。

アラブ国家政治のレベルでは、アラブ情勢の後退、崩壊と分断が生じていることを、我々全員は認識している。その典型的な例は、アメリカの傘と地域におけるアメリカの手先の下に、または、未だにあるアラブの内部では葬りされていなきキャンプ・デービッドの傘の下にすらブロックを規制しようとする画策である。

このような国際的、またアラブレベルでの状況において、パレスチナの大義をふりすて、清算し、または、PLOを封殺してしまうと恫喝するなどの手を使って、パレスチナの大義を清算しようとする陰謀が拡がっている。被占領地内外のパレスチナ人、とくにクウェート在住のパレスチナ人は、新たな抑圧とテロの波を被っている。したがって、こうした微妙な危機的状況に対応するためには、我々全員は、あれこれ言うではなく、行動において、「インティファーダが我々の主要な任務である」とのスローガンを再確立する必要がある。そして、我々は、パレスチナ人がインティファーダを持続し拡大していくように、パレスチナ人が不退転の決意を打ち固めていくように、あらゆる形態の支持と支援を行わなくてはならない。現段階においては、パレスチナ人民の唯一正統な代表たるPLOの

まわりに堅く団結し、PLOを防衛し、我々自身に仕掛けられているすべての陰謀を打ち破れよう、パレスチナの内部戦線を再編しなくてはならないのである。

しかし、この任務を果たすことは、すべてのパレスチナ民族勢力、組織、人士、組合などが、民主的土台に立脚するPLOの枠内で、統一して動かなくてはならないことを意味する。つまり、PLOの立法、行政機関における比例代表の原則を適用し、民族的な不偏の価値と共同の分母を尊重し、違反しないことを断固引き受けていくことであり、PLOの諸機構と機関の内部で、大規模な民主的再編が実行されねばならない。こうした措置を実現するには、PLOの再編の後に、速やかに新PNCを開催する必要がある。

パレスチナおよびアラブの大衆の皆さん。イラク、パレスチナ、そしてアラブ民族に対する残虐な侵略との対峙は現在も続いている。そして、現在行われている政治戦争は、軍事的な戦争と同じくらいに危険なものである。したがって、侵略者どもの陰謀を打ち破るために、全力で立ち向かおう。侵略を押し返そうとし、自らの領土から侵略者の撤退を勝ち取ろうとし、国内問題に侵略者どもが介入し屈辱的な条件を強要しようとするのを阻止しようとしているイラクとの連帯をさらに新たにし、イラクが再建の過程にあるのを援助し、イラクへの禁輸制裁を解除させよう。

インティファーダをあらゆる可能な方法で支

扇動的なプロパガンダの開始を意味したのである。このキャンペーンの後には、イラク経済に大被害をもたらした激しく、かつ破壊的な経済－石油戦争に加えて、イラクとの科学的、技術的、経済的な協力への禁止措置が取られた。もちろん、クウェートと他の産油諸国は、アメリカ政府の命令に従って、この陰謀に片棒をかついで悪辣な役割を担った。

こうした背景から、イラクは、三つの選択肢に直面したのである。屈伏するのか、なす術もなく手をこまねいたままいるのか、それとも、挑戦を受けて立つかのいずれかの道を選択しなくてはならなかった。こうして、イラク軍のクウェート進攻が起つたのである。それは、善惡の問題というより、本質的には、重層的な執拗な攻撃に対する防衛行動であり、危機の開始ではなかつた。

この進攻後は、事態は重大な局面に発展し軍事対決に至ったものの、まだ終了してはいない。その結果として、多くの仮面が剥がされ、多くが隠されていた目的が明確に現われてきたのである。この対決を、どのように総括したらよいのか？

この対決は、イラクとその人民そして軍隊の歴史、そしてアラブ民族の歴史における栄光に満ちた行為であり、将来もそうであると、我々は考える。しかし、この栄光に輝く行為は、信仰深き我が民族が期待したような勝利の冠を抱くことにはならなかつたどころか、逆に、正義の敗北と、悪の一時的な勝利に結果している。

世界中のパレスチナ人の皆さん、大西洋からガルフまでの地域に住むアラブの皆さん、世界中で我々の大義を支援している皆さん。

帝国主義－シオニスト－反動がイラクとアラブ民族に仕掛けた侵略は、パレスチナ革命とPLOを大変困難で危機的な状況に置いた。そこで、こうした状況を乗り越えるために、そして、帰還、民族自決、唯一正統な代表たるPLOの指導の下に民族の地にパレスチナ独立国を建設するというパレスチナ人民の民族的かつ正統な権利を実現するまで闘争を継続するためには、この状況を十分認識することは、我々全員の義務である。

国際レベルでは、アメリカ帝国主義は、何よりも自らの権益を満足させるための世界の、そして地域の新秩序なるものを世界中に勝手に造り上げようとしているところである。さらに、そうした秩序なるものの中には、PLOも、またパレスチナ人の民族的な正統な権利などは、國際的合法性が承認したものすらも存在が認められないのである。

また、そうした秩序の中では、アメリカの支

援しよう。ガルフ危機に際してPLOが勇気ある民族的態度を取ったことから、パレスチナ人の唯一正統な代表たるPLOの位置に影響を与えるようとするすべての陰謀に対決して、PLOとの團結を再確認し、PLOへの責任を果たそう。クウェートで行われているパレスチナ人の抑圧措置を、大声で批判しよう。侵略者をガルフ、アラビア半島から追い出し、地域の安全保障秩序の疑わしき陰謀をもつてアラブとして、現行行っている政治戦争は、軍事的な戦謀を打ち碎くために、闘おう。疑わしき帝国主義－シオニスト－反動同盟の力をもつてアラブ－イスラエル紛争をキャンプ・デービッドの一般化、そして全アラブ化策動によって片付けようとする陰謀に対して、我々全員で闘争しよう。最後に、侵略者、貪欲な奴らに対して闘うことは、一貫して、人民と民族にとって栄誉に輝く行為であったこと、最近の闘いにおいては破れはしたものの、自らの正義の戦争においては破れてはいないパレスチナ人民とアラブ民族にとっても同様である。

挑戦と不退転のイラクに栄光あれ。

インティファーダ人民の子供達、青年、老人の皆さん、石を投げ、ナイフで攻撃し、火炎瓶で闘う皆さんに栄光あれ。

我らが人民と民族は勝利する。敵を打ち碎き、屈辱を与えるよう。

なぜ一時的なかということでは、アラブの権利に対する帝国主義－シオニスト－反動の悪の紛争は、深い根を持つものであり、今世紀の初めから開始された紛争であって、アラブが以来る。したがって、この紛争はアラブの権利が勝利し、悪を敗北させるまで、継続されるだろう。

世界中のパレスチナ人の皆さん、大西洋からガルフまでの地域に住むアラブの皆さん、世界中で我々の大義を支援している皆さん。

帝国主義－シオニスト－反動がイラクとアラブ民族に仕掛けた侵略は、パレスチナ革命とPLOを大変困難で危機的な状況に置いた。そこで、こうした状況を乗り越えるために、そして、帰還、民族自決、唯一正統な代表たるPLOの指導の下に民族の地にパレスチナ独立国を建設するというパレスチナ人民の民族的かつ正統な権利を実現するまで闘争を継続するためには、この状況を十分認識することは、我々全員の義務である。

国際レベルでは、アメリカ帝国主義は、何よりも自らの権益を満足させるための世界の、そして地域の新秩序なるものを世界中に勝手に造り上げようとしているところである。さらに、そうした秩序なるものの中には、PLOも、またパレスチナ人の民族的な正統な権利などは、國際的合法性が承認したものすらも存在が認められないのである。

また、そうした秩序の中では、アメリカの支

援しよう。ガルフ危機に際してPLOが勇気ある民族的態度を取ったことから、パレスチナ人の唯一正統な代表たるPLOの位置に影響を与えるようとするすべての陰謀に対決して、PLOとの團結を再確認し、PLOへの責任を果たそう。クウェートで行われているパレスチナ人の抑圧措置を、大声で批判しよう。侵略者をガルフ、アラビア半島から追い出し、地域の安全保障秩序の疑わしき陰謀をもつてアラブとして、現行行っている政治戦争は、軍事的な戦謀を打ち碎くために、闘おう。疑わしき帝国主義－シオニスト－反動同盟の力をもつてアラブ－イスラエル紛争をキャンプ・デービッドの一般化、そして全アラブ化策動によって片付けようとする陰謀に対して、我々全員で闘争しよう。最後に、侵略者、貪欲な奴らに対して闘うことは、一貫して、人民と民族にとって栄誉に輝く行為であったこと、最近の闘いにおいては破れはしたものの、自らの正義の戦争においては破れてはいないパレスチナ人民とアラブ民族にとっても同様である。

挑戦と不退転のイラクに栄光あれ。

インティファーダ人民の子供達、青年、老人の皆さん、石を投げ、ナイフで攻撃し、火炎瓶で闘う皆さんに栄光あれ。

我らが人民と民族は勝利する。敵を打ち碎き、屈辱を与えるよう。

ハダフ誌一〇五〇号（一九九一年四月一四日号）

問 ガルフ戦が終了した現在、この戦争の結果、また、それが地域に及ぼす影響は？ アメリカ帝国主義の陰謀と安全保障上の諸調整から見た中東の将来とパレスチナの大義が受ける影響は？

答 戦争は、通常、政治的目的によって規定されるものであるから、ガルフ戦争が完全に終了したとみなすことはできない。つまり、時にはアメリカとその同盟者が激化させる紛争によって、時には、アメリカの国家安全保障會議の一翼になり下がった国連安保理が採択する国際的決議の形態をとって、戦争は継続している。だが、純粹に軍事的意味での戦争は終了し、敗北したイラクは南部を占領されているという現実。

導きだされるべき重要な結論は、アラブ市民が完全な民主的生活を獲得し、自らの未来を支配者の意図によってではなく自らの手で作り、この時代の原則と人類の発展過程に沿った創造的な生活を送り、進歩に向けて自ら進み、真に民主的機構を通して決定過程への参加を実現するその時まで、アラブ民族は次々と敗北し続けるだろうということだと思う。

PLO執行委員会は、最近の会議や被占領地の民族統一指導部との協力によって、インティファーダの継続、強化と民族抵抗活動を発展させるために、インティファーダの政治的、組織的、経済的、戦闘的側面を網羅する包括的計画を検討し、主要には、現段階の本質を理解することに焦点をあてた。民族統一、経済的自力更生、国際的同盟者からと亡命中のパレスチナ同胞からの支持の継続を確保する継続的努力をすることにより力点を置かれた。

問 レバノンでは、パレスチナ人を武装解除し、保護なしの状態に放置するとの陰謀があるとのことだが、PLOの政策は？

答 私は、レバノンの合法権力とパレスチナの合法性の相互活動を土台に、パレスチナ人の政治的、社会的、安全保障に関する権利につき、また、パレスチナに帰還するまでの期間、パレスチナ人が闘争していく役割を確認することについて、PLOはレバノン政府と政治的討議を行ふ用意があると、土地の日に演説した。レバノンの合法的主権をレバノン政府が全土に敷衍していくことに対する、我々は障害となるつもりはない。レバノン政府に質問したい。イスラエルの占領は排除されたろうか？ 国連安保理

保するところの安全保障上、経済上の諸調整を成し遂げるだろう。

そこで、パレスチナ問題の扱いは、キャンプ・デービッドの全アラブ化を強要することによつて、いや、それよりも悪い方式かもしれないが、パレスチナの民族的目標を抹殺し、パレスチナ人民の正統な代表を清算させるというアメリカ式解決を探ることにある。

問 ガルフ危機に対するPLOの態度の再検討は？

答 アラファト議長への入国査証発給拒否（九年の国連総会）、少なくとも口ではパレスチナ人民に正義を実行しようとした国連安保理の決議草案をアメリカ政府が撤消させたこと、PLOとの対話打ち切りなど、アメリカ政府による反PLOキャンペーンはガルフ危機以前から存在してきた。

PLOは、戦争回避、アラブ自身による解決を実現させようと全力を尽くしてきた。我々は、イラクによるクウェートからの撤退を第一提案とした。また、地域が外国軍に占領された時も、PLOによる侵略に反対する側に立つ以外ないので、PLOは、米・NATO・「イスラエル」同盟による侵略に反対する側に立つべきなので、PLOの側に立たなくてはならなかつた。そして、PLOはこの侵略の真の目的を暴露したし、危機の初期からかくされてきた敵側の真の動機を知っていたのである。

問 ガルフ戦後の、アメリカイスラエル一同接諸国に定着させることを既成事実にしようとするだろう。

問 カイロで開催されたガルフ戦争後初のアラブ連盟評議会について。

答 國家政治レベルでは、ガルフ危機が新たな同盟関係を作ったのに対し、アラブの大衆は帝国主義の侵略に反対していることは明確である。アラブ国家政治レベルで深い溝ができた結果として、二つの枢軸が形成された。一つは八カ国の同盟関係で、他はマブレブの同盟関係である。この兆候は、すでに九〇年五月に開催されたバグダッド・サミットに現われていたと思う。アラブ・サミットの諸決議で公式に承認されたPLOであるにもかかわらず、いくつかのアラブの政治文書（八カ国が決議したダマスカス宣言）では、参加諸国はそれがアメリカの決定であることを承知しながら、PLOへの言及がなかった。

パレスチナの大義に関するアラブ・サミットの諸決議を遵守する原則に則つてアラブの連帯を作ること、また、インティファーダを支援すること、パレスチナ人民の唯一正統な代表であるとPLOを承認することである。そして、PLOの代用物を探す一方では、被占領地内と外との分断を画策している。その現実形態は、祖国外に亡命中のパレスチナ人は、アラブ諸国的一部に組み込まれていくこと。

PLOを除去するか、少なくとも取り込む陰謀が仕掛けられている。アメリカが欲しているのは、キッシンジャー式の取引である。

PLOの代用物を探す一方では、被占領地内と外との分断を画策している。その現実形態は、祖国外に亡命中のパレスチナ人は、アラブ諸国的一部に組み込まれていくこと。

PLOを除去するか、少なくとも取り込む陰謀が仕掛けられている。アメリカが欲しているのは、キッシンジャー式の取引である。

PLOを除去するか、少なくとも取り込む陰謀が仕掛けられている。アメリカが欲しているのは、キッシンジャー式の取引である。

PLOは、帰還と民族自決、パレスチナ独立国家建設というパレスチナ人民の権利の実現に向け、パレスチナ人民を指導するであろう。外相レベルでの開催が予定されているアラブ連盟評議会では、外国軍の撤退、パレスチナの大義についての関連国連諸決議をどう実行するのかを明確に政策決定するよう期待する。

問 インティファーダにとって、敵シオニストとの闘争においては、非アラブの民族的要素が必要な要素であると認識している。

答 インティファーダにとって、敵シオニストとの闘争においては、非アラブの民族的要素が必要な要素であると認識している。

①イスラエルは、シリアに対してゴラン高原返還を秘密に約束し、アメリカがこれを保障する。

②アメリカーソ連両国が、イスラエルーアラブ紛争を討議する国際的な「協議機関」の結成を計る。この協議機関には、アメリカ、ソ連の両国と、シリア、エジプト、パレスチナ人代表が参加するが、PLOは排除する。

③協議機関の発足を受けて、シリアはイスラエルとの二国間交渉で、ゴラン高原の非武装化を協議する。

④協議が終了し、イスラエル軍が撤退を開始した段階で、外交関係を結ぶ。

重 命 日 誌

一九九一年三月一日
四月一〇日

- 三月一日（月）
・ベーカーミュラク会談。
- 三月一二日（火）
・シリア、九〇〇人のパレスチナ人を釈放。
・ベーカー、イスラエル訪問。PLOが承認した被占領地のパレスチナ人六人とも会談。
- 三月一三日（水）
・被占領地で、ベーカーとの初会談でパレスチナ人代表が提出した一項目文書発表。
・アラファト議長顧問のバッサム氏、イスラエルとの和平に関する談話発表。
・反サッダム政権勢力の会議終了。
- 三月一四日（木）
・ベーカー、シリア訪問。アサド大統領、シャラー外相と会談。
- 三月一五日（金）
・ベーカー、ソ連訪問ソ連外相、ガルフ戦争におけるイスラエルの自制を評価し、イスラエルとの国交正常化を打ち出す。
・イスラエル、ダマスカス街道沿いのPNF（人民闘争戦線）基地を爆撃。
・カイロで、アラブ八カ国外相会議。
- 三月一六日（土）
- 三月二〇日（水）
・イラク国民議会、クウェート放棄決議採択。
- 三月二五日（月）
・サッダム政権、南部の戦車部隊を首都防衛に召喚。北部のカルクークをへりで爆撃。
- 三月二六日（火）
・アラファト議長記者会見・イスラエルとの交渉に向けた原則的立場を打ち出す。
- 三月二八日（木）
・イラク、多党制導入を発表。
- 三月二九日（金）
・イスラエル紙、シリアの秘密提案発表。
・レバノン政府、四月末までのレバノン民兵一派レスチナ勢力の武装解除方針決定。
- 三月三〇日（土）
・カイロで、大使レベルのアラブ連盟評議会。
- 四月一日（月）
・PFLP、政治局声明発表。
- 四月二日（火）
・ジョンブルット、（PSP民兵の）武器をシリア軍に引き渡すと発表。
- 四月三日（水）
・アッサフィール紙（レバノン）、レバニーズ・フォーシズの民兵承認要求文書全文掲載。
- 四月五日（金）
・ベーカー、パレスチナ問題解決に向けた再訪予定を発表。
- 四月七日（日）
・アメリカ下院軍委員会委員長アスピン、ダマスカスでアサド大統領と会談。
- 四月九日（火）
・レバノンのアンナハール紙報道・米大使・ジャジヤ会談で、シリア軍がレバニーズ・フォージズ支配地区には入らないとの合意を了承。

・サッダム大統領、内乱への外国の介入を非難。

・被占領地で、統一指導部アピール六九号発表。

・クウェート、パレスチナ人五〇〇〇人を追放。

・カイロでアサド大統領・ムバラク大統領共同記者会見。

・イスラエル、AIN・カラ（リション・レツィオン）虐殺犯人に終身刑判決。

・パレスチナ勢力、武装解除を決定したレバノン政府に反対表明。